【参加学生の修了レポート①】

自分の中の複文化・複言語能力と日本語教育について考える

1. 自身の教壇実習について

今回の教壇実習では、日本語 B1-1 のクラスで「からだと健康」に関するトピックを扱い、教育実習を実施した。学期が始まって間もない時期の授業を 2 回分担当させていただくという滅多にない経験が出来る期待半分、貴重な授業時間をいただくことに対する責任感半分で、緊張感のある 2 週間だった。本レポートでは、CEFR の観点と自身の教壇実習をふりかえりながら、よかった点と反省点を分析していく。

まず、今回の実習では教案作成から授業資料準備までを通して、CEFR の観点にそった授業づくりを心掛けた。課題から教室活動を組み立てる、という方向性はもちろん、自分が設定した課題が学習者にとって身近でイメージしやすいものになっているかどうかや、Can-do をふまえて学習者が一つ一つの活動の意義を理解できる流れをつくれているかどうかを常に判断軸においた。Can-do は私が前半の短期研修で体験したことをベースに作成し、場面設定を理解するための導入や Can-do の共有までは、流れとしてとても飲み込みやすくできていたと思う。しかし、その後の語彙と表現導入をどのように行うかが難しかった。初日の授業では Can-do を確認したのち、今回の活動で扱う語彙と表現を、場面に即した会話よりも先に提示して先に学習した。まず初めに新出単語などを理解していた方がのちのワークが順調に進むだろうと考えての順番だったのだが、その後自分で文章をつくるワークを行った際、授業で扱った単語のみを使用する学生がとても多かった。「自分が」課題を達成するときのことを想像し、それに必要な言語知識とは何かを考え進んでそれを獲得してもらうという CEFR の観点に照らし合わせると、新出の単語や表現を先に取り出して学ぶのは適切な順番ではなかった可能性があった。その反省を踏まえて、2 回目の授業では、まずモデル文章を導入し、新しい語彙や表現を読み取ったのちに文型練習をした。そうすることで、より活動内容を自分の文脈に落とし込んで考えることができると考えたからだ。結果として、自分の体質など実体験に合わせた語彙を調べて使ったり、授業で扱ってはいないが知っている表現を使ったりできる学習者が少し増えた。ただ、やはり表現や語彙が分からない状態なので、モデル会話の内容理解にかける時間は想定よりもだいぶ増えてしまった。このように、反省点を次の授業の修正に活かすことができたのは良かったが、全ての課題をクリアしながらきれいに修正することは出来ず、授業づくりの難しさを実感することとなった。

また、活動の意図を CEFR の観点に沿って考えていても、指示の言葉選びを間違えて、自分が意図した通りに活動方法が伝わらなかったこともあった。いくら教案の内容をつめても、学習者の反応や自分の細かな振る舞いなどの「事前に予測することができない、実際にやってみなければ分からないこと」に対応するちからが必要だと感じた。

2. CEFR を用いた第二言語教育について

この一か月強の実習では、前半の韓国語短期研修や普段の生活を通して自分の中の複言語・複文化的能力に気づき、後半の日本語教育実習を通してそれを伸ばすための教育とは何かについて考えた。この一か月間、特に後半の期間は韓国語のみに囲まれて生活をしていたが、基本的に書きことばの熟語などは読めても理解することができず、苦労することがあった。ただ、書きことばは漢語であるものが多く、漢字の読み方にハングルをあては

めて意味を類推することで内容を理解できることが何度かあった。また、お店で注文する際なども韓国語をどうにか駆使しながら現地の方とコミュニケーションをとろうと努力していたが、相手が外国人だと気づくと率先して英語を使って話しかけてくる方が多くいらっしゃった。そういったときは英語と韓国語を混ぜながらコミュニケーションをとった。このように言語能力が不足した状態でも、今ある複言語能力を駆使して状況に応じた対応をする機会が多く、それが特別なことではないということに気づくことが出来た。これまでに私が経験してきた言語学習では、まず 100%の言語運用能力を身につけることが求められ、そうすればやりたいタスクも達成できるという方向性をとっていた。このような学習方法では、まず言語能力の向上が目標になるが、各自が課題に向き合い「自分が」それを達成するために何が必要かを考える学習形式のほうが自律学習につながりやすく、より身近な言語能力を得ることにつながるのではないか。また、これは後半の実習をしながら気づいたことだが、同じレベルのクラスでも漢字が得意な人、話しことばが得意な人、タイピングが速い人など各自の得意分野とそのレベルは割とバラつきがある印象だった。そのため、授業ではグループワークやペアワークを積極的に活用し、最大限お互い協力し合うように指示した。このようにタスクを達成するために様々な能力値の人々が協力し合うことを通して、社会において課題を達成するためのプロセスに必要な学びを得ることが出来るだろう。

3. 前半に韓国語を学んだことについて

前半の韓国語短期研修では、韓国語学習者として 3 週間日常生活を送った。この間、直接法の授業を受けながら「外国語学習者」としての自分がどのような部分に着目して授業を受けるのか、常に振り返りながら過ごした。私が今回、会話による活動をメインとするクラスに配属されたということもあり、先生方は休み時間の際も積極的に韓国語で話しかけ、韓国語で雑談する機会をつくってくださった。研修期間中最も参考になったのは、教科書の文法もそうだが、そういった先生方の指示や雑談のフレーズである。これまで学習してきた文型やフレーズに関する教科書の例文以外の使い方を見聞きすることを通して、自分の知識が広がる実感がしてとても面白かった。韓国語に不慣れながらも生活者として滞在しながら、より生活に密着した実践的な韓国語に触れることができるところが直接法の授業の長所だと感じた。また、先生方は文法や語彙の導入の際に韓国の食文化や観光地などの写真を提示し、文化的差異について生徒が知っていることを発言する機会を多数設けていらっしゃったので、授業内容に関心を持って学習を進めることができた。導入内容を工夫し学習者の関心をいかにひくことができるかも、後半の日本語教育授業をつくるうえで着目する必要のある点だと学んだ。

日本語教育実習の準備をしながらこの短期研修に参加した 3 週間の経験を何度も思い出すことがあった。研修時に自分が先生のことばをどのように観察していたか、活動の指示を受けてどんな印象を抱いたかなど「外国語学習者」としての自分の実感が、この実習全体にとって大変重要だったと後から気づいた。これは後半の日本語教育実習のみに参加していたら気づけないことだったであろう。また、前半の研修期間があったからこそ、生活者として韓国に少し長い期間親しみ、病院にかかったり、買い出しをしたりと様々な経験をすることができた。それらを通して何かしらの言語知識を得た経験が、教案の Can-do づくりにも活きた。もともと、韓国語や韓国文化を現地でもっと深く学びたいという理由からこの短期研修に参加したが、韓国で暮らしながら言語活動と社会とのつながりを身をもって学ぶことで後半の実習に向けた学びも同時に得ることができ、とても充実していた。

【参加学生の修了レポート②】

実習を終えて

1. 自身の教壇実習について

私は日本語 B2-1 のトピック 2「住まいと住環境」の授業を担当した。教壇実習を行った 4 時間のうち、1 時間を理解、2 時間をやりとり、1 時間を表現という時間配分で、それぞれの Can-do が達成できるよう授業を構築した。

CEFR の観点から授業を振り返ると、成功していた面と失敗していた面の両方があると感じた。成功していた面は、それぞれの活動における場面設定である。CEFR を参照した授業は、特定の文法や単語を教えるための授業ではなく、Can-do を達成するための授業となる。学習者がそれぞれの Can-do を達成できるような、かつ現実に起こり得そうな場面設定を行うことが求められるが、それに関してはある程度成功していたと思う。しかし、その場面において Can-do を達成するための活動や、授業の流れに関しては、特に理解においては失敗していた。失敗していたと考える点はいくつかある。

まず、授業の導入としての「今自分が住んでいる家の様子や、改善したい点についてペアで話す」という活動を設定したことである。この活動は、一つ前のレベルである B1-2 のトピック 2 の Can-do の内容の復習と、授業の導入を兼ねて設定したものである。しかし、トピック自体に興味を持ってもらい、今回の Can-do を達成するための導入としては不十分であった。学習者の日本語のレベルを考慮しても不要な活動であった。そして、理解のメインの活動である「記事を読む」活動も失敗していた。まず、読んでもらう記事が少し長く、学習者にとって理解が難しかった単語が、私の予想外の部分で多く存在していた。そのため、当初の予定よりも理解の活動の時間が 30 分ほど長くなってしまい、更に私が生徒に単語を説明する時間ばかりになってしまった。学習者が意欲的に、自発的に学ぶのではなく、教師が生徒に教えるという構造になってしまったのだ。原因としては理解の Can-do には「記事をどの程度まで理解できれば良いのか」ということが書かれておらず、自分の中でどの程度までの理解が求められているかを明確にできていなかったこと、学習者のことを知らなかったために個人のレベルや学習上の困難な点が予想できていなかったことが考えられる。原因には、私の経験や知識では考えが及ばない部分が多いと思うが、だとしても授業の仕方を工夫する、例えば学習者自身にわからない単語の意味を調べさせ、詳しく説明するのは重要な単語だけにとどめる、などが出来れば、起こらなかった失敗であると考える。

やりとり・表現の活動は、時間が短くなってしまったことを除けば、大枠は成功であったと考える。しかし、表現の活動では場面設定や目標を生徒と共有し、意識してもらうことが上手くできず、Can-do の達成ができなかった生徒が出てしまった。活動の指示や導入の際に、私が詳しい場面設定や目標をうまく伝えることが出来なかったためである。

教壇実習を通し、CEFR を参照にした授業を作り上げることの難しさを改めて実感した。事前授業としてお茶大で模擬授業を行ってはいるものの、日本人学生を対象に、グループで 50 分の授業を作り上げるだけでは CEFR を理解し、実践に移すには不十分であり、おままごと程度のレベルでしかなかったのだと実習を通して実感した。

2. CEFR を用いた第二言語教育について

今回の教壇実習を通して、CEFR を参照した第二言語教育の良さとともに、CEFR の考えをそのまま教室に用いることの難しさも実感した。CEFR を参照した第二言語教育の良さとしては、例えば、学習者自身が自身の状況や言いたいことに合わせて学習する単語を選

んだり、使ったりできることである。CEFR を参照していない授業では、教えるべき項目として単語や文法が存在するため、ある種の型にはまったものしか学ぶことが出来ず、特に低いレベルでは自分の表現したいことを表現することはかなわないことが多い。しかし、Can-do を達成するための授業構成であれば、学習者自身が言いたいことを考え、何を言うか選ぶことができているように感じた。

しかし、難しい点も多くあった。例えば自身の教壇実習では、理解の活動において単語の意味を説明しすぎてしまったことが CEFR の観点からは失敗であったと考えた。しかし、授業後に生徒にとったアンケートでは、「説明するとき、例を説明してくれて知りやすかった」「言葉の説明をよくしてくださって、本文の内容が理解しやすかった」という声が半数以上の生徒からあがっていた。教師からの説明が長すぎたというのは、CEFR の観点からは失敗であったが、学生からは好評であったのだ。ほかにも、大学である以上、テストや評価が存在する。その中にはペーパーテストも含まれるため、「テストに出る部分」を設定する必要がある。なので、学習者にとっては不要だと感じる単語でも教えたり、学習したりする必要がある場面がどうしても発生してしまう。

CEFR は第二言語教育を行う上で重要な部分を多く持っていると思うし、生徒にとっても教師にとっても多くの学びが得られるものである。しかし、CEFR のみを用いるのでは不十分な場面が多く、それぞれの教室や生徒に合わせて、CEFR を参照する部分としない部分のどちらも含めた授業が良いのではないかと考える。

3. 前半に韓国語を学んだことについて

実習の前半は、3 週間の韓国語研修に参加した。この研修は、私にとって困難が多いものとなった。研修では、韓国語のレベル別にクラスが編成されていたが、そのクラスのレベルが私に合っていなかった。私はハングルの読みも危うい状態で研修に参加したが、当初のクラスは生徒の殆どがアイドルやメディアなどを通じて韓国語に触れていたり、学習したりしていた。そのため、授業のスピードについていけず、深夜まで授業の予習復習を行っても、授業についていけなかった。クラス変更は原則受け付けていないという案内があったことあり、韓国語を学習したいと思う気持ちがこの時点で消え失せてしまった。結局はクラスを変更し、適切なレベルの授業への参加が叶ったが、挫折を乗り越え、韓国語をちゃんと学習したいと思わせるものがなく「授業をこなす」という認識となった。その後インフルエンザにかかり、授業はオンライン参加に、文化体験の一部は不参加となった。クラス変更と、オンラインでの参加によって、変更した後のクラスにもなじむ時間があまりなく、全てに思い入れを持たずに韓国語研修を終えることになった。

正直、散々だったと断言できる韓国語研修だが、得られたものも確かにあった。それは、適切なクラス編成の大切さ、授業に置いていかれる感覚を体感したことである。まず、今回の釜山外大での韓国語研修は、プレイスメントテストがあったにも関わらず、適切なクラス編成がなされていなかったと思う。適切なクラス編成がなされないと、学習したいと思う気持ちや授業に積極的に参加したいと思う気持ちがなくなってしまうのだと実感した。言語を習得するための授業が、言語を習得したいと思わせる気持ちを殺してしまう結果になりうるのだ。そして、授業に置いていかれる感覚を味わったことは、韓国語研修における最も大きな収穫だった。今までの人生で、授業に完全に置いていかれることはなかった。そのため、このような学習者の気持ちや悩みが上手く想像できず、「そのような学習者がいた場合は個別に対処すればよい」という程度の認識でいた。しかし、今回の研修でその立場に立ったことによって、そのような学習者にとって教室がどんな存在であるか、個別の対処の限界とされたときの気持ちなどが想像できるようになった。実際、教壇実習を行う際も、この学びをいかし、授業に置いていかれる学習者が出来るだけいないようにする授

業構成や振る舞いを心掛けることができたと感じている。そしてこの学びは、教壇実習や言語の授業の枠を飛び越えて、「人にものを教える」という行為を行う際にも生かせるものであると考える。日本では、小学校に日本語ボランティアとして参加しているため、その場でも学びを生かせるようにしたい。

さらに、韓国語の学習を通じて文化を学ぶことが出来たことも、韓国語研修の学びであった。その学びを直接授業に生かす場面はなかったものの、授業を作っていくうえで多くの助けとなったのではないかと考えている。韓国語のレベルが低いこともあり、複言語主義の観点や考えを意識したりすることはなかったが、もっと韓国語のレベルが高ければ、その機会もあったのではないかと考える。

4. 現地の人との交流

実習期間中は、お店の店員さんや大学のスタッフはもちろん、チューターとしてついてくれた学生や、お茶大に留学していた学生など、数多くの韓国人との交流があった。交流を通じて、まず、日本人に対して優しい人が多いことにとても驚いた。日本と韓国の関係は決して良いものではなく、悲しい歴史が確かに存在している。現在も、反日・嫌韓の気持ちをもつ人も少なくない。韓国に行くということは、反日の感情を向けられる対象になるのではと考えていた。しかし、実際はそんなことはなく、むしろその逆で、日本人だとわかるととても優しくしてくれたり、日本語で話したりしてもらえた。一度だけ독도・竹島の問題について直接言われたり（どんなことを言っているかは分からなかったが、독도・竹島についての話をしていることだけ分かった）、福島の処理水の問題についてのポスターなどを見かけたりすることはあったが、優しくしてくれる、親切にしてくれる人の方が圧倒的に多かった。これらの交流は、韓国という国自体をより好きになる大きなきっかけになった。そしてなにより、親切にしてもらえばしてもらうほど、自身の語学力のなさや文化への理解のなさを悔しく思い、より韓国語や韓国について知りたいと思わせてくれた。韓国語研修や日本語教育実習はかなりつらく、苦しい思いをすることもあった。しかし、このような交流が頑張る原動力になったと感じる。それは帰国した今も同じで、韓国でもらった優しさを忘れず、どのように還元していくか、自身の学習につなげられるかを考えるきっかけになっている。

この留学のメインは韓国語研修と日本語教育実習であるが、現地の人との交流でとても多くの学びや勇気を得たと感じている。これこそ留学する醍醐味のひとつであり、これからの韓国と日本の関係を考える上でも、大切なものなのではないかと感じた。

【参加学生の修了レポート③】

CEFR の実践を通して

1. 自身の教壇実習について

1 回目の教壇実習では、『自分の家や部屋について説明できるようになろう』という目標を設定した。しかし、CEFR の観点から考えると、それは抽象的すぎる目標だったのではないだろうか。私は、釜山外国語大学が採用している Can-do を 2 回の教壇実習で達成することに気を取られ過ぎていた。とにかく Can-do を達成するためには、この単語が必要だとか、この文型が必要だとか、そういう単純な考えで教案を作成していってしまったのだ。しかし、釜山外国語大学の『レベル別総合日本語科目(通称、レベル別授業)とは』(2018)でも述べられているように、『Can-do シラバスの授業では、学習者にとって身近で、十分起こりうる場面や状況を設定』する必要がある。目標は授業の最初で提示し生徒の興味を引く、非常に重要なものである。目標次第で、生徒のやる気を左右すると言っても過言ではない。だからこそ、生徒がやる気を出すような、達成したいと思えるような目標を提示する必要があるのだ。それが私の第一回目の目標のように『自分の家や部屋について説明できるようになろう』などというあいまいなものでは、きっと生徒はこれから何を学習し、この授業を通し何ができるようになるのか掴みにくかっただろうし、目標を掴めないまま進んでいく授業自体も退屈に感じたに違いない。例えば、『友達が自分の家に遊びに来ることになりました。友達が道に迷わないよう、自分の家や家の周りについて分かりやすく説明しましょう』など、より具体的な状況を設定し、活動を行ったり、目標を示したりすべきだったと、振り返って思う。

CEFR の 4 つのコミュニケーション言語活動のうち、仲介活動を取り入れていなかったことに、実習後気が付いた。私自身実際に海外に行ってみてわかったことだが、日常で外国語を使用する際は、圧倒的に仲介活動が多い。私たち自身、韓国の街中で日本語が分かる韓国人に何度も助けてもらったし、時には自分が、韓国語が分からない友達と韓国人を仲介することもあった。私自身、韓国語のレベルで言えば、今回担当したクラスと同じ A2 くらいではないかと思うが、それでも十分仲介活動は可能だったわけである。それを身をもって知っていたにも関わらず、授業に仲介活動を取り入れることを忘れていた。行動中心アプローチを採用している CEFR に則った授業を行っているのだから、より社会で起こり得る活動である仲介活動を組み込むべきであった。例えば 2 回目の教壇実習の最後に行った『自分たちの家・部屋を紹介しよう』という活動は、『日本人の友達が韓国で暮らす家を探しています。しかし友達は韓国語が分からないので、自分たちがおすすめの家を紹介してあげることにしました。友達が住みたいと思うような、紹介の文を考えましょう』というように、仲介活動として行えば良かった。

『コンビニ』という単語を説明する際は、日本のコンビニと韓国のコンビニの違いを説明したり、間取りを説明する際は『和室』という日本特有の概念を紹介したり、単語と絡めて文化知識も提供することができた。これは、CEFR が学習者の能力として挙げる一般的能力のうち、叙述的知識の習得に繋がる。しかし、文化知識も教えなければという気持ちばかりが先走り、文法や単語の話をしていたのに流れを無視して突然文化の話をしてしまい、生徒も多少混乱していたように見えた。話の流れを考え、上手く文化の話に導入するような授業構成を考えていく必要があると感じた。

2. CEFR を用いた第二言語教育について

行動中心アプローチを採用している CEFR では、生徒も主体的に学ぶことができる上、

文化知識も身に着けながら学んでいるため、その言語を使用する国に対する愛着や興味も湧くようになると感じた。私は今まで、CEFR を用いていない第二言語教育をいくつか受けてきた。その中には、ロールプレイを導入している授業もあり、活発に授業を受けることはできたものの、何となくそのロールプレイを他人事としか考えられず、主体的に取り組むことはできなかった。今思い返せばそれは、ロールプレイが学習者に起こり得る状況ではない設定のものだったからなのではないだろうか。そのロールプレイは、文法や語彙を身に着けるためには役立つが、決して社会で役立つことは無い。それでは、生徒が主体的になれなくて当然だ。私が教壇実習で行った活動の中には、実際に社会で役立つようなものも、あまり役立たなそうなものもあった（行動中心アプローチをすべきだとは分かっていても、どうしても A2 レベルだと行える活動に限りがあるため、多少社会では役立たなそうな活動も行わざるを得なかった）。しかし、生徒が活動する様子を見ていると、やはり『自分の家を紹介してみよう』など、実際社会で役立ちそうな活動の時の方が、生き生きと主体的に活動できているように感じた。一方、生徒の主体性に任せた活動は、生徒のレベルによって完成する文にばらつきが出てしまうため、教師は評価することが難しくなる。でも、直前に授業で習った文法や語彙だけを使用するのではなく、自分が生きているうえで身に着けた様々な日本語の知識を活用して文を作るという作業こそ、実際に社会で求められるものだ。教師も、評価が難しいからと言って使う文法を誘導するような、生徒を押さえつける活動ではなく、自由に活動させ、評価なども柔軟に対応していく必要があると感じた。そうすることによって、「社会で行動する者」を育てるという CEFR の教育目的は達成される。また、文化知識を授業内で提供することで、その言語に親しみが湧くとも考えられる。私は今まで、第二言語教育の中で文化知識を教えられた経験はほとんどない。そのため、どこか学習中の言語に対し距離があり、親しみや愛着が持てなかった。しかし、私が行った教壇実習では文化知識も教えることで、生徒は日本により興味を持ってくれたように感じたし、授業中に生徒に配ったフリーズドライのみそ汁なども、予期せず日本文化に触れる良い機会となったように感じる。味噌汁を配るという発想は、前半の韓国語研修で先生が時々ソンムル（プレゼント）をくれたことが、ささやかながら生徒のやる気に繋がり、場も盛り上がったことから刺激を受け思いついた。しかし、教師とは言えあくまで実習中だった私には生徒に渡せるものが無く、日本から持ってきて結局食べることのなかった味噌汁を、持って帰るのも面倒だし、生徒に配るソンムルとして丁度良いのではないかと軽く考えていただけだった。しかし、生徒にとってはそれも日本文化に触れる良い機会となったようで、休み時間には、配布した味噌汁、『あさげ』『ひるげ』『ゆうげ』の違いを聞かれ、そこから味噌にも地域ごとに種類があることなど、日本の文化を紹介することができた。生徒たちは、私のつたない韓国語の説明でも、興味津々で耳を傾けてくれている様子だった。正直、私も教壇実習を行う前までは、文化知識を教えるということの重要性を、あまり理解していなかったように思う。でも実践してみると、そのように授業中、ささやかながら異文化と接することで、生徒は言語そのものや、その言語を持つ国への新たな視点からの興味が湧いていたようだった。それはつまり、異文化に寛容な姿勢を育成することにも繋がる。文化知識と言語知識を結び付けて考え、文化知識を教えることも重要視する CEFR による教育は、異なる文化、異なる他者に対し寛容な姿勢を育み、異なる他者とともに生きる市民を育てる、という目的を、しっかりと果たしていることを実感することができた。

以上のように、CEFR に則った教育を実践することで、「社会で行動する者」を育て、異なる他者とともに生きる市民を育てる、CEFR の目的を達成できることを実感することができた。

3. 前半に韓国語を学んだことについて

韓国語を学んだことによって、机間巡視の際、生徒からの質問に韓国語で答えることができたり、休み時間中の生徒との雑談で盛り上がったりできた。日本語を学ぶ教室であるからと言って、教室内で日本語しか使用しないといった状況は、決して複言語主義とは言えない。学習者が今まで身に付けてきた母国語での会話スキルを活かすことのない空間にならないよう、柔軟に対応することができた。

4. 実習の前から韓国で生活したことについて

同じ実習に参加した大学よりも、長い間韓国で生活していたからこそ、教えられることが多かったように思う。例えば、日本で言う「アパート」「マンション」といった区別が韓国には無く、全て「アパート」であることや、韓国のコンビニは日本とは違いトイレや駐車場が無いことなど。韓国で実際に生活していたからこそ、気が付ける日本との差異があった。もし、このような差異に気付くことのないまま教壇実習を行っていたら、生徒が今まで身に付けてきた韓国の文化知識と、教師である私が身に付けてきた日本の文化知識との間に齟齬が生じ、生徒にとって分かりにくい授業になっていたに違いない。日本語教師には、生徒の母国について知ろうとする姿勢が重要なのだと気が付いた。

＜参考文献＞

釜山外国語大学（2018）レベル別総合日本語科目とは（修正済）2018（5）．PDF 版，p.1

【参加学生の修了レポート④】

釜山外国語大学での各実習における体験と得たもの

1. 自身の教壇実習について

まずは 1 回目の教壇実習について振り返っていく。1 回目の教壇実習では、「自分と身近な人々」というテーマで、やりとりと表現の分野について授業を行った。授業の前半では家族の紹介について、まず私自身の家族についての紹介、次にアニメ『サザエさん』を例に出して家族の紹介や言い方を学び、最後に生徒自身の家族について紹介するターンを設けた。そして、授業の後半では、自分の憧れの人や好きな人を紹介するため、私自身の好きな人を紹介し、その文章から作文のためのポイントをグループで確認、全体で解説し、最後はそれぞれ自分の好きな人についての作文をしてもらった。

1 回目の授業では、行動中心アプローチを実行するため、基本の活動をグループワークとプリント記入とし、生徒の積極的な学習行動を促進した。B1 レベルということで、身近な話題を取り扱いたいと考え、家族と自分の好きな人を題材として選び、また紹介するという行為は普段出会う場面であると考えたため、これらを授業の軸とすることを決めた。1 回目の授業の良かった点としては、まだ顔を合わせて間もないのに、特に前半部分で、グループ活動の際に生徒たちが活発に話し合ってくれたところである。反省点としては、前半と後半の接続が悪いところ、この授業内での目標がはっきり示されておらず、授業に整合性がないこと、そして後半の作文が B1 レベルには難しかったというところが挙げられる。改善案として、授業内ではっきりと目標を示すこと、教案の時点で授業を通してストーリー性を持たせ、前後の繋がりに整合性を持たせること、そして出す課題のレベルを下げるか、もしくはもっと構造化して文法的な説明を取り入れることを考えた。これらを踏まえ、2 回目の授業の教案を作り直した。

次に、2 回目の教壇実習について振り返っていく。2 回目の教壇実習では、「住まいと住環境」というテーマで、理解の分野について授業を行った。授業全体の目標は、「日本で一人暮らしをすることになったら住みたい家を説明することができる」と設定した。授業の前半では、1 回目の授業で用いたアニメ『サザエさん』の、磯野家一家が住む家の 3DCG 映像とプリントを使って家の構造を説明し、異なる 2 つの間取り図を比較しメリットとデメリットなどについて話し合ってもらった。授業の後半では、最初に私が住んでいる家についてのリスニングをし、次に日本の大学生が家を選ぶ際に重視する条件ランキングを当てることと、最後にその条件を元に自分が住みたい家がどのような家か考えてもらうということをした。

2 回目の授業でも 1 回目の授業と同様に、行動中心アプローチを実行するため、基本の活動をグループワークとプリント記入とし、生徒の積極的な学習行動を促進した。また、身近な題材として、興味を持ちながら授業に参加させることをねらい、「大学生の」家の条件ランキングを持ってきた。これは結果的にとても盛り上がり、韓国と日本の文化の違いを知るきっかけにもなったため、良かった点だと言える。しかしその反面、少し私が喋りすぎてしまった部分もあったので、その調整ができるようになることが今後の課題である。また、前回の反省を活かし、授業内で今回の目標を確認し、目標に沿って授業全体に一貫性を持たせ、繋がりに整合性を持たせるものにした。また、出す課題のレベルも下げ、誘導が多く解きやすいものとなるように意識した。良かった点としては、前回の授業に比べて授業全体に一貫性や整合性があったこと、そして前回よりも複文化主義的側面が増えたということが挙げられる。反省点としては、前半の動画を見せる部分で少しもたついてしまったところと、予定にない例や説明をした時にもたついてしまったところが挙げられる。

改善案として、事前に動画視聴中の動きの指示をもっと出しておくことや、予定にない説明はしないということが考えられる。

最後に、教壇実習全体を振り返っていく。私は終始ティーチャーズトークではなく、砕けた話し方で話していたが、これには良い点と悪い点があった。良い点は、生徒との距離が近くなることと、CEFR の目指す社会言語能力や言語運用能力の向上につながることである。悪い点は、生徒の習熟度によっては言っていることを理解できない可能性があるということである。1 回目の授業でも、追加で入れた情報の説明を十分に入れないまま授業を進めてしまい、その知識がうまく伝わらずに授業が終わってしまったということがあった。そのため、初出の用語などは必ず板書をするか、そもそもその言葉を発さないようにしなければならない。

全体的にどの生徒も全く授業や活動に参加しないということはなく、グループワークも活発に行うことのできるクラスにすることができたのではないかと考える。

2. CEFR を用いた第二言語教育について

「社会で行動する者」を育て、異なる他者と共に生きる市民を育てることは、「教育」という大きな枠で見た時に大切な目標であることは間違いなく、言語という意思疎通に必要不可欠なものを通じてそれを学ぶということは、言語習得だけでなく「市民」を育てるということの一番根源的で効果的な方法であると考える。今回実際に教案を作っていく中で、日本語を学び始めたきっかけがただ日本文化に興味があるからというだけではなく、就職に有利だからという理由もあるということを知った。そのため、もし日本に留学や就職でしばらく暮らすことになったら、ということを想定して授業をすべきではないかと感じた。また、そういう授業をすれば自ずと日本の文化や慣習についても身につけることができ、いつか日本に滞在することになっても「日本での市民」としてのアイデンティティーを獲得することができるのではないかと考えた。このような経験から、ヨーロッパが CEFR を考えたことについて、異文化理解を促進し、複文化主義を推進するのにとても良いことであると考える。

3. 前半に韓国語を学んだことについて

前半で韓国語を学んだことで、母語話者から学ぶ言語学習の学習者の気持ちがよくわかった。私は韓国語の初学者で、日本語を教えた韓国の学生さんたちは中級レベルだったので習熟度は違うが、元々何を言っているのか全くわからない、怖い、という状況から始まり、だんだん理解ができてくると今度は言いたいことがあるのに言えないというもどかしさに苦しむという過程は、どのレベルにもあることであり、この感情をいかに和らげ、やる気につなげられるかが鍵だということがわかったのは、とても良い経験だった。この時の気持ちや経験が、教壇実習で助けになったと感じる。

また、その国の言語を学ぶことで、韓国の文化についてより吸収できるものがあったと考える。なぜなら、知識として知っている文化でも、その国の言葉を知っているとその文化の捉え方や感じ方がより現地の人々に近づくからだ。日本語で表現するのとその国の言葉で表現するのとでは、微妙にニュアンスが違うこともある。その違いを知ることで、さらに文化の理解に深みが出る。また、語彙の出自を知ることで、その国の歴史にも触れることができると考える。例えば、韓国語の単語には時々日本語と同じ発音で、同じ意味のものもある。これは日本と韓国の交流の多さを物語っている。このように、言語を学ぶとそれまで見えてこなかったその国の文化の隅々が見えてくる。

4. 韓国人学生との交流の中で感じたこと

今回、韓国語研修でのチューターさん、教壇実習期間中のチューターさん、実際に教壇実習で教えた学生さんたち､そして最終日の日韓フォーラムで交流した学生さんたちなど、たくさんの韓国人学生との交流があった。そのどれもが日本語で行われたことに対して、私は少し悔しく思った。私の韓国語と彼らの日本語のレベルに大きな差があったことは仕方がないが、こちらは母国語で楽に話せるのに相手は一生懸命日本語で伝えたいことを伝えようとしてくれるその姿を見て、私も対等であるべきだと少し後ろめたさを感じる場面があった。そのため、韓国語に限らず学習した言語はある程度意思疎通ができる程度には習得したいと強く思った。

【参加学生の修了レポート⑤】

複言語・複文化で過ごした６週間

1. 自身の教壇実習について

自身の教壇実習について、完成度、実践の成功、実践の失敗を分析し、順に述べます。

一点目の、授業の完成度について、約 1 週間の自由な韓国見学期間と、日本語教育実習が始まった後の 1 週間の授業見学実施期間の合計 2 週間で準備を行った、1 回目の授業に関しては大変納得のいく教壇実習となりました。その一方で、2 回目授業は 1 回目授業を受けて改善点と反省点を得つつも、そこから教授者としての動きを全て改善するには至らなかったという点で、授業開始時に、完成された授業プランを想像することができないものでした。2023 年前期に実施された事前授業、「多文化交流実習Ⅰ/日本語教育法演習Ⅰ」での模擬授業にて、準備期間にだんだんと CEFR の掲げる行動中心アプローチからは離れてしまった経験から、常に教室内の活動を想像しつつ準備を行っていました。学習者が授業にひきつけられ、参加意識を持つためには行動中心アプローチに沿って具体的な活動を目標として立て、Can-do ができるようになっていくことを、常に意識していなければならないと考えました。

そこで使用する表現や語彙を導入していくことを心がけていました。こうした観点で授業を組み立てていく際に、2 回目授業にて具体的な教室内での動きや活動の仕方が明確な形にならず、最終的にはご指導いただいた釜山外大の先生から受けたご助言をもとに授業を作っていきました。教壇実習中の休憩時間にて、先生からのご助言をもとに授業内の活動を改善するなど、準備不足と教室で授業を行うことへの想像力がまだまだ足りなかった点がありました。

しかし、自身の授業で生教材を用いた点、それに学習者が興味と関心を持って、学習者の現段階より上のレベルのことまでも読み取ろうとした意志が出ていた点は、実践の成功と言えます。活動の前に行う場面設定を、学習者にとって非現実的でない、現実に起こり得る場面とすることで、学習意欲を高めることになったと考えます。加えて、直接教授法にて授業を行なったため、ティーチャートークを意識して和語を用いました。このことによって、レベルが高めの活動であっても、学習者が活動と向き合えていた点は成功と言えるように考えます。

自身の実践の失敗としては、既出語彙の復習をフラッシュカード的に行って、授業の進度が速いものであった点、活動ごとの振り返りやフィードバックを十分に行わなかった点があります。前者に関しては、すでに学習していることを前提にしてスピード感を付けましたが、その割には授業資料の準備に時間がかかり、教室内の学習者も受動的に教室の前を見ているだけになってしまった点から失敗と言えます。後者は、2 週間の授業を経て痛感した点で、自身が人前で、1 人で発表する行為に躊躇いを覚えるせいで、いざ教授者になった時にそれを活動に取り入れられないということです。そのために、活動のフィードバックがいまいち学習者に伝わらず、全体的な授業の流れを理解せず授業の内容が流れてしまった点から失敗と考えます。

2. CEFR を用いた第二言語教育について

ヨーロッパは、二度の世界大戦を経て「異なる他者」への理解と融和を図るために CEFR を考え出したというのが主流の議論かと考えます。しかしそれとは別に、難民や労働者移民も「異なる他者」として融和を想定していると考えます。これらは、現在では労働者移民の移住のために必要な言語能力の指標となっています。CEFR は指標にとどまるために、

その使い方によってはとても画一的かつ数値的に言語能力を測ることにもなってしまいかねません。釜山外大の日本語教育という、実際に大学生と日本語を学習する現場でも、はじめは新たな評価基準が加わったという認識を持っていたり、学生自身にもその認識が見られたりしました。また、授業内では、具体的な Can-do に基づいた実践的な日本語を指導するときと、手書きの練習や 2～3 行程度の簡単な文章を読むという、従来の教室内の授業的な活動が併存している状況でした。後者の活動までも文脈化することで、活動間のつながりを自然にして、集中力を切らさない力が、教授者には求められると考えました。もしくは､自律した学習者を目指すことに焦点をあて､活動が行われる場面をあえて説明せず、場面を自由に想像してもらう時間を持つという方法もあると考えます。CEFR の形式や指標ではなく、その理念や背景をよく承知して教室内の活動を組み立てていくことができるような日本語教育を目指す必要があると考えました。

社会で行動する者には、1 人のうちに異なるレベルや使い方を行う言語が複数存在していて良いとする、複言語・複文化主義があります。さまざまなレベルが内包され混在している状態をよしとしたうえで、学習者の「できる」点に着目し、伸びしろを「これからできたら良い」点と捉え、目標を設定します。それを教授者についてもあてはめると、教授者の特性も「できる」点として着目し、自身の「これからできるようになったら良い」点を考えることも可能だと考えられます。先に挙げた教壇実習にて起きた失敗からは、自身が授業構成を考える際に､｢自律した学習者｣になっていく学習者の姿を常に想像すること、人前で積極的に発表することや過度な遠慮を払拭することの 2 点が、「これからできるようになったら良い」点であると言えます。し知識の授与を行う存在ではなく、教室内のコミュニケーション活動をファシリテートする存在になることを意識していこうと考えます。

3. 前半に韓国語を学んだことについて

韓国語（朝鮮語）の勉強をする中で、直近で言語学習者の気持ちを味わうことになり、授業を聞いている人はどの程度先生の話を理解しているのかをよく実感することができました。直接教授法にて教えてくださった先生方の振舞や発言の仕方が、とても参考になるものが多く、ティーチャートークの重要性と難しさも感じつつ日本語教育実習に入ることとなりました。レベルがある程度揃えられているとは言え、やりとり・理解・表現の何が得意か、考えることより話すことが得意かなどは、学習者によって異なります。また、第二言語で話された言葉を全て完璧に理解することは、かなり高いレベルの学習者でないと難しいことです。こうした当たり前だけれども教授者として立つときは味わえない感覚を知ることができた点は、その後具体的に教室で教授者として振る舞う自身の姿を想像する時に大いに役立ちました。

また、韓国語能力自体については、自分でじっくりと考えたうえでなら質問したり、話しかけたりすることが可能ですが、私はまだまだ聞く力が足りないことを痛感しました。簡単な表現はできるが、ネイティブとのやり取りが難しい、というような状況です。そしかしそのような状況でも、日常的な買い物ができ、生活に必要なものを購入したりお店へ行ったりできる点に、驚きを感じました。

4. 日々の生活からの考察

少し上述しましたが、最低でもゲストハウスで生活した後半の 3 週間、我々は自力で生活することが求められていました。CEFR と Can-do アプローチによって、日本で行う具体的な活動を考えている一方で、実際に韓国にて、周囲が韓国語ばかりの環境に浸っていたとしても最低限の韓国語レベル、なんなら韓国語能力がなくとも短期間ならば生活できてしまうことを感じた期間でもありました。

加えて、韓国と日本は似ているために違いが際立ち、逆に「日本の良さ」を鮮明に感じてしまうこともありました。これは、ナショナルアイデンティティの前景化と言えます。慣れない環境で生活するということ自体に負荷は伴うものですが、そこから「日本」という言葉で語ることが適切なのかどうか、発言と比較したがる思考にも思慮深さを持つことが重要だと考えます。6 週間という期間は長いようで短く、我々は韓国に短期滞在したのであって、実際に長く生活することで見える景色をとは異なるものを見たということを前提に、韓国での経験を語る必要があると考えました。

＜参考文献＞

金田智子（2020）「Ⅱ．オランダにおける移民等に対する自国語教育の内容について」『生活者にとって必要な「ことば」を考える：平成 19 年度成果普及セミナー報告書』、17-28

深澤のぞみ他（2021）『日本語を教えるための教授法入門』、くろしお出版

深澤のぞみ他（2019）『日本語を教えるための教材研究入門』、くろしお出版